

論文

軍縮気運に対する陸軍第四師団の 満州事変前後における政治活動 — 関西財界人平生鈞三郎への接近を中心に —

正 田 浩 由

Political activities of the 4th Division against the trend toward
disarmament before and after the Manchurian Incident:
Focusing on their approaching Hachisaburo HIRAO,
a businessman of Kansai

SHODA Hiroyoshi

一、はじめに

平生鈞三郎（一八六六 — 一九四五年）は美濃国（現在の岐阜県）加納出身の関西財界人¹である。「日本財界の一巨頭」と評されたこともあり、²さらには廣田弘毅内閣の文部大臣や日本製鉄株式会社会長、北支那方面軍経済最高顧問、³大日本産業報国会会長、翼賛政治体制協議会東京支部長⁴などを歴任、「東条内閣の財界での最大の支柱」⁵でもあったし、晩年は枢密顧問官にも就いていた。一九四五年一月二七日に死去した際には「政

界、財界に大きな足跡を残した」と報じられた。⁶

前述の文相就任の経緯について、第一次近衛文磨内閣で商工大臣を努めた吉野信次は次のように回想している。なお、ここで出てくる「後宮」とは後宮淳（後述）のことである。

「そのとき後宮（のちに大将となる）という人が陸軍の軍務局長（正しくは人事局長—正田）⁷ですね。大阪の師団長（正しくは参謀長—正田）をしていたことがあるので平生さんを知っていた。広田内閣のときに、なんでも文部大臣がはじめきまらないで内閣を組織したのではないですか。後宮さんがちょっと思いついて、大阪に国土の平生がいるが、あれをひとつやってみようと陸軍から推薦したんですね。」⁸

この時陸軍省人事局長として「二・二六事件の後始末に痛く苦心」⁹していた後宮は、平生のことを「国土」と呼んで文部大臣に推薦したのであった。

そして、後宮だけでなく、寺内寿一（後述）との関係もその就任決定に影響したようである。

当時、例えば「廣田内閣が二、二六事件後の国体明徴教学刷新を条件とする文相の詮衡難に陥つた時、平生老が引張り出されたのは、文政審議会委員とか、甲南高校の校長とかいふ肩書よりも、第四師団長時代の寺内大将と、意気投合した関係を忘るべきでない」¹⁰と論じられ、さらに「寺内陸相は平生が川崎造船所の社長当時（平生の社長就任は一九三三年三月二四日—正田）、第四師団長として、大阪にゐた寺内と交友があり、寺内も平生の人格には相当信用をおいて居」るとも述べられていた。¹¹

また、文相就任後の一九三六年十一月一日、寺内陸相が西園寺公望の秘書の原田熊雄に「内閣調査会（企画院の前身の一つである内閣調査局のこと—正田）」の話をした際、平生について次のように述べていた。

「吉田（茂。内務官僚—正田）は長官を辞めさせて洋行でもさせ、そしてあすこに平生を無任所大臣にして持つて行つてやらせたい。軍部と内閣との間には何等の隔りもないのであるが、新聞が拳つて両者の間にいかにも隔りがあるかのやうに説き、離間中傷しようとする空気が見えるので、

自分がこの間車中談として、『政府とは一心同体である』といふ話をしたのである。廣田総理は自分に向つて、『自分は指導するといふよりも、寧ろ総理として閣僚間の統制を図つて進むのである』といふ話であつたが、それならやはり誰か指導する閣僚を物色しなければならん。さうして所謂行政改革なんかをやらなくちやあならん。それにはやつぱり平生がいゝんぢやないかと思ふ。で、彼なら自分もよく話ができる。』¹²

さらに一一月四日に廣田首相は原田に対して次のように話している。

「総合機関が出来れば、平生文部大臣は『大臣を辞めて、その機関の長官になる』と言つてをり、その後任者としてしきりに近衛公爵を推してゐる。陸軍大臣なんかもやつぱり『平生文部大臣が適任だ』と言つてゐる。今度は四相会議とか五相会議とかをやつて、人の配置をあゝしたのは、やつぱり陸軍と具合のいゝ連中を結局一纏めにしたのであつて、即ち頼母木（桂吉。逋信大臣—正田）とか平生とかいふのを四相会議の中に入れたのである。』¹³

このように平生と陸軍との間には強い繋がりがあつたのであり、廣田内閣期に寺内と浜田国松衆議院議員（政友会）との間で所謂「腹切り問答」が起つた際に平生は寺内に同調し、内閣の総辞職を主張していた。¹⁴

他にも平生は、第一次近衛文磨内閣組閣時、商工大臣への就任要請を受けていた。女婿の水澤謙三に、次のような手紙を送っていた。

「已に御承知の通り、小生は軍部より新内閣（第一次近衛内閣）へ入閣の勧誘がありましたから、余は、文部省ならば余が畢生の事業として努力措く能はざる国家の基礎を固めるため、一日も忽にすべからざる小学教育の向上完成ともいふべき、義務教育の年限延長を執行いたすの機会到来するものと考へ、承諾いたしおきましたが、近衛内閣は如何なる考なるか文部大臣には他人を決定し、余に商工大臣として入閣を勧められました。余は大臣たらんため入閣するものでなく、教育に関する自己の信念を達成せんため入閣するものですから、自信無きポストには就任しがたしとの理由で辞退致しました。（傍点正田）」¹⁵

後に平生の秘書として産業報国会に入った中林貞男は、「平生さんは米

内内閣以外は全部入閣交渉を受けてるんです。文部大臣ならやる、ということ
で広田内閣で文部大臣をやっていますが、あとの内閣で商工相だの拓務相だのという要請を受けたときは全部断わっています。教育が大事だから、という考えで。」と回想しているのだが、¹⁶大臣になれさえすればどのポストでも良いというのではなく、教育行政にこだわって商工大臣などへの就任要請を断わったことも陸軍に好まれた理由の一つのように思われる。

また、陸軍が二・二六事件後に政治の「推進力」となり、軍部大臣現役武官制を復活させて内閣に対する生殺与奪の権を得ていた¹⁷中での、ほぼ全ての内閣からの平生への入閣要請が事実だとすれば、それが示しているのは親軍財界人としての平生の姿であり、平生なら陸軍も反対しないだろうという見通しがあったようにも思われる。日鉄会長就任の噂があった時も「軍部方面の好感があり」云々と報じられていた。¹⁸

しかし、ここからは想像しがたいかも知れないが、かつて平生は軍縮を唱えて活動していた。当然軍縮は陸軍にとっては喜ばしい話ではなく、そのため平生に対し、大阪に司令部が置かれていた陸軍第四師団が働きかけを行うことになったのである。

この接触後、平生は軍縮から対外膨張へと認識を変化させたのであり、さらには前述のように平生と陸軍が強い繋がりを構築するようになった。

そこで本稿では、ロンドン海軍軍縮条約をめぐる当時の輿論と平生の活動を受けての第四師団の平生への接触とその「成果」について検討し、それが何故齎されたのかについて考察する。

そもそも師団とは鎮台の廃止に伴って一八八八年に設置されたもので、¹⁹平時における内地の陸軍部隊が全て属し、師団長は天皇に直隷していた。満州事変までは内地に一五、朝鮮に二個師団が設置され、内地の一師団が二年交替で満洲に駐劄し、関東軍の指揮に入っていた。²⁰

師団司令部条例を見てみると、師団長は「師管内に在る軍隊を統率し軍事に係る諸件を総理」（第一条）し、「師管内軍隊の出師準備を整理し又徴兵の事を統轄」（第二条）する。また、「部下軍隊の錬成に就て其責に任」

(第三条)じ、「不慮の侵襲に際し師管内の防禦及陸軍諸官庁諸建築物の保護に任」(第四条)ずるものである。さらには「師管内に在る軍隊及陸軍官庁に於ける風紀軍紀を統監し軍法会議を管轄」(第六条)し、「軍政及人事に係る事に就ては陸軍大臣 国防及出師計画に係る事に就ては参軍 (= 参謀総長—正田) 教育に係る事に就ては監軍 (= 教育総監—正田) の区処を受」けるのであり、師団長は「此三官に対し各其主任の事に就き定期或は臨時報告をなすべきもの」(第七条)で、「随時の部下の軍隊を検閲し毎年教育期の終り……の後に於て全師団教育の結果能く実践の目的に適するや否又其出戦整備完全なるや否に就き監軍を経て奏上す」(第九条)る。²¹

ここからは、軍事組織としての師団の本来の姿(軍令=統帥)が見えてくる一方で、第七条では「軍政」への関与について若干言及されている。²² 後述するように、第四師団は軍令に止まらず、平生に接近するなどの政治的な動きを見せていたのであった。

なお、先行研究についてだが、第四師団に関するものは管見の限りほとんど見当たらない。あっても概説的なものにとどまっている。²³

一方、本稿で論じる第四師団と平生の接触については滝口剛も言及・分析している。²⁴ただ、滝口の研究対象は平生と、彼が中心の一人となった自由通商運動であり、第四師団の政治活動を分析したものではない。

二、ロンドン海軍軍縮条約をめぐる輿論

一九三〇年一月から四月まで開催されたロンドン海軍軍縮会議に参加した日本の全権は若槻礼次郎元首相(その後第二次内閣を組閣)であった。日本を発つ前の一九二九年十一月八日、大阪で開催された送別会で、若槻は次のように述べた。

帝国の方針としては、海軍軍備の制限から進んで、出来得る限り縮小しようとするもので、「他をも(ママ)冒さず他よりも(ママ)冒されず」というモットーを掲げて進みたい。島国の日本は国防上国民に不安を与えることがあっては

ならない。また、国民は生活上、物資を海外から受けているのだから、海運に不安を与えるようなことがあってもだめだ。これらも十分考慮に入れて会議に臨む覚悟である。自分にどれだけのことが出来るか疑問だが、国家のため、世界平和のために出来るだけ努力したいと思う。²⁵

このように国家や世界平和のために尽力することを誓って日本を發ち、軍縮会議で条約に調印した若槻は、一九三〇年六月一七日、約半年ぶりに郵船北野丸で帰国、神戸に入港した。この時の神戸港の様子について、『大阪朝日新聞』では次のように報じられた。

「『御苦勞様』若槻全権！ ロンドン會議の檜舞台で世界一流の政治家を相手に華かな平和の戦をなしたこの近代的ヒイローはかくして全国民の渦巻くやうな歓呼の裡に晴れて故国への第一歩を神戸埠頭に印した

この日の神戸港は前夜来の梅雨じめりもカラリと晴れ眩惑するやうな六月の陽光が街々の藁に、浅緑の海面に、市背山一帯の青葉に、てり映えて輝ける我等の全権を迎へるにふさはしく、お昼すぎ一はけ過ぎた驟雨も街路を清めて朗かな気分が満ち渡つた、北野丸が横着けされる第四突堤K上屋の入口には大日章旗が交叉され、この横に『歓迎』と墨書した大旗がハタハタとはためき渡り、紅白だんだらの幕をはり廻らした上屋の楼上には全権の郷党を代表して島根県知事代理萱場学務部長、松江市長、市会正副議長はじめ官民有志およそ六百名がひしめき合ひ上屋入口から京橋を経て商船会社支店前に至る沿道には市内中小学校の男女生徒や専門学校、大学の学生約一萬人が手に〜小旗を持つてゐた、この間には若槻会をはじめ歓迎の男女諸団体が身動きもならぬくらゐにつめかけ神戸港はじまつて以来の歴史的光景を展開した」²⁶

熱狂的な歓迎ぶりが伝わるが、このような歓迎は神戸だけでなく、六月一八日に到着した東京駅でも見られた。「若槻全権入京 熱狂的大衆に答へ 首相と感激の握手 歓呼のうちに宮中に参内」という見出しで、「東京駅頭は全権の東京いりを見んと集ふ市民等が種々な歓迎旗を翻して次から次へと繰込み、警視庁では約四百名の警官をフォームから駅頭、広場に

かけて設置し警戒につとめた……かくて列車が着くや、怒たうのやうにおこる萬歳の聲、拍手の音、歓聲、絶叫の中に若槻全権は後部の客車から例のすらしとした長身を現した」²⁷と報じられた。当時、西園寺の代理で若槻らを出迎えた原田も「非常に盛大な歓迎であつた」と述べている。²⁸

このような熱狂的歓迎について、一九三〇年六月一九日の『東京朝日新聞』朝刊の社説では、「会議の協定の結果が申分なく満足だといふて居るものは一人もない。国際的にも、国家的にも、相当遺憾の点はありながら、兎に角国防を危くせざる程度において軍縮協定が出来たことに対し、世界の平和と国民の負担軽減の上に心からなる喜を国民が感ずるからである。」²⁹と分析されている。

なお、若槻の回想にはこの歓迎ぶりについての言及がないが、ただロンドン滞在中に日本の「少学校生徒から、たくさん慰問の手紙を受取つた」ことに触れ、「日本の子供たちが、私の任務を理解し、私の苦心に同情して、心からなる言葉を贈ってくれたということは、どれ位私の心を動かしたか知れない」と若槻は述べ、さらには最初のうちは一々返事を書いてしたが、その後だんだん数が多くなり、何百という数になったので返事を書くのをやめてしまった、それは今でも残念に思っている、と論じている。³⁰ここから若槻を応援する声が多々あったことが窺える。

周知のように、この条約をめぐる「統帥権干犯問題」が生じて大騒動となり、その後「暴力が横行する時代への幕開け」³¹とされる、佐郷屋留雄による濱口雄幸首相狙撃事件を招来するほどであったが、しかし、条約に調印した彼の帰国を多くの人々が歓迎したのも事実である。そして平生ら関西の財界人たちも軍縮に対して積極的姿勢を示し、行動していた。

三、経済更新会の結成と平生の軍部観

この頃までの平生についてだが、³²一八九〇年に東京高等商業学校を卒業後、一八九一年には韓国仁川海関幫弁となった。そして一八九三年には

正 田 浩 由

兵庫県立神戸商業学校の校長に就任するため帰国。翌年には東京海上保険株式会社に入社、そこで「各務（鎌吉—正田）のいゝ相棒となつた」。³³ その間ロンドンに赴任することもあったのだが、主に関西の支店（大阪・神戸）を任された。また、甲南学園を創設するなどした。

一九二五年に東京海上の専務取締役を退いた後は、政府の委員会の委員などへの就任が急増し、本格的に政治と関わるようになった。一九二八年に勲五等瑞宝章を受けたのを皮切りに、一九二九年には「内閣総理大臣の監督に属し其の諮詢に應じて国民精神の作興、教育の方針其他文政に關する重要な事項を調査審議す」³⁴る文政審議会の委員になるなどした。

この平生が結成に参加したのが、「京阪神の実業家を網羅」³⁵していると報じられ、彼が「牛耳を取つていた」³⁶とされる経済更新会であった。一九二九年一〇月二七日の『東京朝日新聞』朝刊によると、「経済国難に災された時局を打開」するための実業家の結束を必要とする要望が盛んに唱えられている中、大阪で経済更新会が組織され、一〇月二六日に大阪クラブで「平生夙三郎、阿部房次郎、田附政次郎、片岡安、弘世助太郎、安宅彌吉氏等実業界各方面の代表者が発起人となりその委員会を開催」、規約などを発表した。規約では、「本会は国家財政の緊縮と国民経済の更新を目的としこれに合致する政策を支持しその遂行を後援するものとす」、「本会は現に政党政派に関係なきものをもつて組織す」などと定められていた。³⁷

平生は、「経済更新会が政党政派に関係のない、独立せる大阪商工業者の堅実なる団体として存在することは、政府に対する一敵国を形成し、政府に対して充分の威力を発揮し、正々堂々、是を是とし非を非とし、是と信ずる政策を実行するものはこれを支持し、これに反するものはこれを排斥し得ることであるから、健実公正なる実業家にとつては甚だ必要である」と考えていた。³⁸

同会は一一月二七日には発会式・会員総会を開いた。そこでまず阿部房次郎を座長に推し、そして坂田幹太が発起人総代として今日に至るまでの経過を報告、委員選挙の後、午後の懇談会について打ち合わせを行った。

この時大阪商業会議所理事の高柳松一郎が緊急動議として若槻軍縮全権に激励電報を発することを提議、文案は委員付託として可決された。

午後になり濱口雄幸首相と井上準之助蔵相が来場、すぐに午餐会に移り、その後懇談会を開催、平生が経済更新会の趣旨と使命を述べ、次に濱口、井上の演説があった。³⁹

濱口と井上の来場から、濱口内閣が経済更新会を重視していたことが分かる。大阪朝日の「財界六感」というコラムでは、この会の目標とする所が「政策そのものである」と指摘、「もし現内閣にして、現に共鳴を得つつある政策の実行を遅疑したり、或は回避したりするにおいては、少くとも現内閣は、大阪における有力なる実業家の支持後援を失ふことになるのは当然である」、さらに「今度大阪に経済更新会の生れたことの意義を、現内閣の諸公に十分理解せしめたいものだ」と論じられている。⁴⁰

そして若槻への激励電報発信を決めたことから、同会の軍縮への姿勢がよく分かるのだが、この軍縮と経済との関係性について一九三〇年（日時は不明）、平生は同会の講演で次のように述べていた。

我々は、経済界の行き詰まりを打開し、その根本的な建て直しを行うために金輸出解禁を断行する以外にないと主張し、政府に金解禁を断行させた。

しかし、急にアメリカに「大不景気が襲来し、我国輸出の大宗たる生糸貿易に大障害を与え、二十余万個の滞貨を見ると共に価格は半減とな」るなどしたため、日本は「大不景気の淵に沈」み、株券の暴落はもちろん諸物価が一斉に低落し、国民全体が深刻な財政難に陥るに至った。

この状況に対して金輸出再禁止をし、次いで新平価で再び解禁すべきだと主張する人がいる。だがこれは「国際貸借上に非常なる不利益を生ずるは勿論、対内的にも貸借関係に於て大混乱を生ずることは何人も疑わ」ないところである。この際経済更新会は大阪の商工業者の有力な集団として、「迷論謬説」に惑わされないよう声明を出す必要があると認め、決議を求める。

このような「経済国難」に最も緊要なことは、国民負担の軽減であり民力の休養であり、我々は政府に向かってこれを要望すべきだ。ロンドン海軍縮条約が、一時は枢密院の審査のために停頓し、一部の人にはこれによって政変が生ずるのではないかと危惧の念を抱かせたぐらいであったが、急転直下可決批准を得たことは、国民一同が満足するところである。「英国よりの招待状にも民力休養の目的を以て特策せられありと聞けば、海軍条約に依る剰余金は主として民力休養に充当すること其会議の趣旨に適うものというべく」、政府が国民の声を聞いて負担を軽減しようとする誠意があれば、国費の重要な部分を占める陸軍費に大整理を行って公約を実行すべきだと確信している。

我々は「民力休養国民経済の充実」こそ国防の要諦で、武力の充実は前者を待って初めてその威力を発揮し得るものだと信じる。私は委員を代表し、満場一致でこの提案が可決されることを希望する。⁴¹

さらに満州事変勃発前日の一九三一年九月一七日、岡部長景⁴²と面会した平生は「軍閥の跋扈につ」いて次のように述べた。

最近軍縮を求める声が多くある。不景気が深刻になるにつれて益々軍事費の軽減を要望する声が増えるのを軍部は大変気に病み、何とかして軍備拡張熱を煽ろうと、日本が今や亡国の危機に瀕しているというような妄説を流布させている。だがこのようなことは、徒らに「愚民を一時的に充奮せしめ得るの効果ありとするも、有識者をして恒久的に首肯せしむるものにあらず」、却って軍部の誠意を疑わせてしまう恐れがある。

国防や軍備は全て国民の基礎の上に建てるべきである。にも関わらず、国力に相応しくない負担を国民にかけているのであり、国民をその重荷に耐えさせるようにしなければ、国民は必ず軍部に対して不満を持つに至る。軍人は我が国の制度上では天皇に直属するような形をなし、帷幄上奏の特権を有し、天皇の統帥権の下に隷属しているためか、「皇室とか陛下とか国体とかいふ如き、国民が自由批評を許されざる名目の下に国民に臨むが如き態度なきにあらず」。だから、軍事を論じたり軍部を批判する時国民

は常に戦々恐々としていて「其忌諱に触るる事を恐るるものの如し」。

国民の意志に反して軍人が跋扈すると、両者は「互に阻隔するに至り」、民心は軍部から離反してしまうかも知れない。軍人は国民に対する嫌悪の念を深くし、益々横暴を極め、遂に由々しき事態を引き起こすに至るだろう。その結果は「畏くも皇室に累を及ぼすなきやを憂ふ」。

外国の歴史を見ると、軍人が国民の自由を抑圧し、さらに国民の負担を無視して、濫りに国防の充実を図って戦争を行なった。これによって国民と軍部の間にギャップが生じ、国民に反軍部思想が醸成された結果、国民は「君主政治を廃して共和政治を希望する」こととなり、「終に君家の亡滅を來す事は欧州に於ても幾多の事例が示すところである」。だからこそ「君側に在りまた陛下最高顧問たる内大臣、元老、宮内大臣の如きは率先してかかる趨勢に対しては之を緩和し之を抑止するの方策を工夫せざるべからずと思ふ」。⁴³

このように、国民の基礎の上に立った、つまりは国力に応じた国防や軍備を目指し、そうすることで「軍閥の跋扈」を抑え、国民と軍部との間にギャップが生じるのを防がなければならない、そしてそれは「皇室に累を及ぼ」さなためであると平生は論じていたのであった。

四、大阪軍縮促進会の結成

一九三一年三月三日、満州事変勃発の半年前だが、大阪軍縮促進会が結成された。これが組織される過程であるが、貴族院議員であった関直彦が一九三一年一月一九日に東京で軍縮国民同盟⁴⁴を結成し、その支部のようなものを大阪に設けようとして平生に相談した。そこで平生は、高原操、高柳松一郎、阿部房次郎などと協議し、有力な実業家や学者などを発起人に、同年三月三日に結成したのであった。⁴⁵

これについて『大阪朝日新聞』は次のように報じていた。

「平和を希望する大阪各方面の有志が相寄つて軍備縮小を促して内は財

正 田 浩 由

政を整理し国民の負担を軽減し国力進展をはかり外は列国を誘つて軍備を縮小せしめ世界平和の確立を計らうといふ趣旨で大阪軍縮促進会を組織することになり、創立準備を進めてゐたが三日午後一時から大阪クラブに第一回発起人会を開催した、発起人は大阪の有力者を揃へ同会設立の上は東京の軍縮国民同盟と提携し更に京都、名古屋、神戸等々全国に及ぼし統制を保つて目的の貫徹を計るはずで次の如き趣意書を関係方面に発した

趣意書

我国の歳計を見るに陸海軍費は総予算の約三割に上り他の費目に比し甚しく権衡を失せり、今や財政を整理し国民の負担を軽減し国運の大削減を措いて他によるべき財源なきや明かなり、吾人は過去における軍人の功績を認め今なほ軍事を重んずる点において敢て人後に落ちざるものなりといへども国防は国力と伴ふべきものにして国力以上の軍備はたゞに国民の苦痛たるのみならず目下の国際関係に鑑み殆ど何等の意義を有せざるものなりしかして列国の国民もまた均しく軍備の縮小と世界平和の確立を希望せざるものなきにより我国は率先列国と協同して軍備縮小を高唱するの要ありと信ず 如上の趣旨に本づき吾人はこゝに大阪軍縮促進会を組織し広く同志の協力を仰ぎ国民の大運動を促がしよつて以て軍縮の実現を期せんとす

発起人 なほ発起人は左の諸氏である

野村徳七、阪田幹太、本山彦一、高石真五郎、田附政次郎、安宅彌吉、佐多愛彦、東川嘉一、一瀬叅吉、永井繁、星野行則、平田護衛、河田嗣郎、森平兵衛、加藤晴比古、平生釵三郎、栗本勇之助、下田将美、阿部屋次郎、林龍太郎、高柳松一郎、田口八郎、弘世助太郎、松崎壽、能島進、清瀬一郎、村山龍平、高原操、和田信夫（順序不同）

右のうち三日の発起人会には

佐多、一瀬、平生、林、星野、阪田、栗本、高石、下田、安宅、東川、阿部、高柳、田口、弘世、平田、加藤、河田、田附、永井の諸氏出席
大阪クラブ三階の談話室で会議を開き

一、本会は大坂軍縮促進会と称す

二、本会は我国の軍備を国力相当の程度に縮小し且各国と協調の下に各国の軍備を最小限度に縮小すべき機運を促進し世界の平和に寄与するを以て目的とす

三、本会は前条の目的を達するため左の事業を行ふ

イ、軍備及び軍費の調査研究及びその発表

ロ、演説会、講演会の開催

ハ、内外の同種団体との協力

ニ、その他常任理事において必要と認むる機宜の処置

の三ヶ条を始め会の組織についての規約を決定し同二時散会した。」⁴⁶

このような大阪財界の動きについて、大阪の実業家は政治運動に巻き込まれることは好まないが、軍縮によって国民の負担が軽減されることは実業家たちの負担の軽減につながるので、大阪軍縮促進会に「誰もかれもが、表面は兎も角も、隠密においては翕然として入会し」た結果、「軍部に対して隠然たる一大敵国を形成するに至つた」と平生の伝記では論じられている。⁴⁷残念ながら、軍縮促進会の評価に言及している史料はこれ以外には見当たらなかったもので、実際に「一大敵国を形成」したのか分からない。ただ、大阪財界の有力者たちによる軍縮促進会の結成を、軍が喜ばなかったであろうことは容易に想像し得る。

五、第四師団の対策と平生

陸軍は、当然ながら軍縮に対する世間の反応を気にしていた。例えば一九三一年九月四日（満州事変勃発の二週間前）、外山豊造憲兵司令官が二宮治重参謀次長に「軍縮及反軍縮運動状況ニ関スル件報告（通牒）」をしており、そこでは同年八月中の「反軍縮運動ノ概況」と「軍縮運動ノ概況」の両者について報告されている。⁴⁸また、翌日には前述の軍縮国民同盟の「反戦的態度」について、次のように報告していた。

「軍縮国民同盟に於ては露西亞の所謂産業五ヶ年計画に対し軍部側と根

正 田 浩 由

本的に見解の相違あるを以て近く何等かの形式に依り該計画の真相を發表し軍部の覚醒を促すへしと称しつゝあり」⁴⁹

そして大阪に司令部が設置されていた第四師団であるが、「関西方面言論界」向けの対策を講じていた。後述の、平生らとの軍事研究会もその一環であった。軍事研究会開催の一年前の一九三〇年一〇月に提出された、陸軍省軍務局軍事課作成の「第四師団司令部に定員外人員増加配属の件」という文書では次のように書かれている。

「決済案

関西方面言論界の状況に鑑み之か操縦の爲め第四師団司令部に佐官一名及囑託一名を定員外として増加配属致し度

右乞決済

昭和五年拾月四日

理由

大阪に於ける各種言論機関は従来より関西方面言論指導の爲一大勢力を有し爲めに第四師団長は従来より之か操縦に専任すへき所要人員の増加を熱望しある所なるか最近外交及財政方面より軍縮の輿論喚起の爲関係中央部より大阪に所要の人員を配置せる形跡あるのみならず某々大新聞には既に直接の手段を講し其の言論操縦の策しあるやに聞く然るに第四師団司令部定員内の人員を以てする片手間的指導を以てしては従来とても事実所望の効果を収め得ざる状況に在り況んや多方面に於て前述の如き手段を講ずるに於ておや(ママ) 翻つて現下国内言論機関の論調を顧るに陸軍として特に深甚の注意を要するものあり其の誤れるを是正し適正の軍の要求を国民に理解せしめんか爲には軍部としても亦相当の施設要するものあり

然れとも之か爲今直に多数の人員を充当するは困難なる状況に在るを以て不取敢此際既に経験ある適任者を助手と共に第四師団司令部に増加配属し以て該方面言論機関の操縦に任せしむるは刻下喫緊の要事なりと思考す之れ本案を実行せんとする所以なり

処置

- 一、専任の佐官一は兵器本廠の平時編制附表備考配属人員中現に使用しあ
らざる位置を『大阪兵器支廠に』流用し師団司令部に於て服務せしむ（従
て陸軍平時編制の定員内なり）
- 二、月額百圓内外を以て適任者（成るべく在郷将校）を物色し囑託として
採用することとす⁵⁰

その後、一〇月一六日に、同じく軍事課によって提出された、同じ件名
の文書では次のように書かれている。

「副官より第四師団参謀長へ通牒案（陸普）

関西方面に於ける国防思想普及業務に専任せしむる為今般佐官一名及囑
託一名を貴師団司令部に増加配属のことに定められたるに付通牒す

追加囑託は貴師団に於て適任者を採用せられ度所要経費は増加令達せら
るへきに付申添ふ⁵¹

当時第四師団長であった阿部信行（在任期間は一九三〇年一月二二日
から三二年一月九日まで⁵²）は、のちに原田熊雄に対し、「自分は大阪師団
長の時に平生氏が関西実業家の重鎮であつた関係から、殊によく知つてゐ
る。軍人についていろ〜諒解してゐない点があつたから、諒解させるた
めにちやうど当時参謀長の後宮（淳一正田）少将を以てしば〜会合させ
た⁵³実業家の中の一人であるから、殊に平生氏とは懇意だ。」と述べていた。⁵⁴

このように、阿部が平生ら「関西実業家」に、「軍人についていろ〜
諒解」させるという目的で接触したのが軍事研究会であり、一九三一年九
月一八日（柳条湖事件当日）に「第四師団の首脳部と大阪に於ける軍縮促
進会の連中と会谈せんと阿部第四師団長よりの申出ありたるにつき参会⁵⁵
したのが始まりであつた。

一方の平生も、第四師団の軍人たちとの会合を待ち望んでいた。という
のも、「陸軍側に於ける誤解ありて、先日来大阪に於ける国粋大衆党なる
ものが亡国的軍縮排撃同盟なるものを組織して」平生の同志に脅迫まがい
の行動に出、さらには「参謀本部の建川（美次一正田）^{（ママ）}中将又は小磯（国

正 田 浩 由

昭一正田) 軍務局長を派遣して軍拡鼓吹の演説をなさしめたる等、好ましからざる行動に出づるため」であった。⁵⁶

ここで出てきた国粋大衆党の行動についてであるが、具体的には「パンフレットを送り、あるいは立会演説を迫り、あるいは自ら訪問して極端なる軍拡論を唱え、軍縮論者を非国民なり、売国奴なりとして罵倒し」たのであり、⁵⁷満州事変勃発の翌日には大阪朝日新聞社に同党総裁の笹川良一が訪れるなどしたのであった。⁵⁸

また、建川についてだが、一九三一年八月五日の『大阪朝日新聞』の朝刊の社説(「軍部と政府 民論を背景として正しく進め」)に対して「参謀本部第一部長の建川少将らは、高原編輯局長に対して強硬な反論や抗議をつきつけた」⁵⁹のであり、さらに平生と第四師団の軍人が大阪で接触する直前の一九三一年八月三十一日、建川は講演で、「今回の軍縮は世界各国真面目に考へて居るものは一つもなくたゞ風雲急なる歐洲のために開かれるもので我が軍部としては反対である」と述べていた。⁶⁰

建川だけではない。満州事変直前の陸軍内の空気は次のようなものであった。

「最近満洲問題は各方面論議の的となつてゐるが陸軍々部においてはその特殊の立場から満洲問題について種々の論議をさしはさみ、更に又その機に乗じて軍縮反対の叫びを揚ぐるに至り、さきの師団長会議においては南陸相が満洲の重大を説いて暗に幣原外交の軟弱を攻撃し、続いて金谷参謀総長の樺太における軍縮反対講演が世上の注目を引き、その他陸軍々部内における若手将校が会同して満蒙に対する積極政策軍縮反対の叫びをあげ、今年度の簡閲点呼においては、現役軍人が堂々と満蒙の危機を叫んで、軍縮の不可を説くなど陸軍軍部の態度はいよゝゝ露骨になつて来てゐる」⁶¹

この時ちょうど中村大尉事件(参謀本部の中村震太郎大尉が満州での調査旅行中、スパイ容疑で中国兵に殺害された事件)が大きな話題となっていた。

こうした状況下で、平生たちと陸軍との接触が始まったのであった。

六、軍事研究会と世相の変化

前述のように、阿部から平生らに対して面会の申し出があったため、一九三一年九月一日に「欣然として之にに応じて参会」、民間側は平生、高原操、高柳松一郎、田附政次郎、河田嗣郎が参加した（招待されていた大阪毎日新聞の高石真五郎はこの日は不参加）。一方の陸軍側であるが、「後宮参謀長、師団附中村少将、湯上四師団囑託の三氏のみ」の参加で、阿部は来なかった。これに対して平生は、「阿部第四師団長よりの申出に依りこの会が設けられたりと思ひ急遽東京より帰阪したるに、阿部氏が参会せられざることは甚だ遺憾とす」と述べている。⁶²

平生は後宮らに、我々は軍の技術的なことを聞こうとしているのではなく「国防の方針、之に順応する準備等大局問題につき意見の交換を行はんとするもの」なので、師団長が不在では十分話し合うことが出来ない、阿部が参会可能な日時を選んで会見することを求めた。ただ、せっかくの機会ということで平生は陸軍側と話をした。具体的には中村大尉事件についての自身の考えを話したのであった。

「目下中村大尉惨殺事件につき我政府は強硬なる交渉をなしつつあるが、支那側より考ふれば曩きに満州にある関東軍に属する将校等是我政府の命令にあらざりて勝手に張作霖を惨殺したるとき、支那政府は之に対して何等の抗議もなさず泣寝入となりたることは最早 open secret なれば支那人間には知れ渡り居ることなれば、若し日本がこの問題を口火として武力占領とか武力干渉をなすに於ては支那政府は張作霖惨殺の事実を掲げて世界の同情に訴ふるなるべく、之に対し我政府は如何なる弁明をなすべきや、陸軍側の意見如何」

平生は張作霖爆殺時の中国側の「泣寝入」を挙げ、中村大尉事件を一つの契機とした、陸軍の中国への強硬姿勢を暗に批判しているのであるが、この問いかけに対して後宮は、「今や世界は弱肉強食なれば自己の權益擁護の爲めには國際的信義も國際公法も条約も反古として力を以て圧するの

外なし」と答えたのであった。

平生は、後宮のこの発言について、「我軍人の真意を露骨に表はすものといふべし」と日記に批判的に書いているが、軍人たちとの会合自体については、「国民の実力を知らずして軍備のみに汲々たる軍人側と、軍備の膨張が国家の基礎を危ふすることを恐るる我々と胸襟を開き相談することの機会を得た」として喜んだ。⁶³

この日から約二週間後の一〇月一日付の外山憲兵司令官から二宮参謀次長への報告（「満洲事変ニ対スル大阪財界方面ノ反響ニ関スル報告（通牒）」）では、平生の態度について、「未タ日和見的雰囲気ヲ脱セサル感アリ、引続き注意中」と述べられていた。⁶⁴

そして平生は、一〇月三〇日に阿部と会談した際、自由通商を唱えてきた⁶⁵財界人らしく、阿部に対して「万一国際連盟が最後の手段として経済断交と決したるときは我国は孤立して経済を維持することは至難と思ふが、軍部之に対する考案如何」と尋ねたのだが、その質問の後、「満州は日本の外廓にして、他国がこの地に勢力を扶植することは我独立に対する脅威」なのでこれを防止すべきである、日露戦争もまた「この理由に依りたるに外ならざるべからざると主張せざりしや」と満洲事変を認めるような発言をしていたのであった。

平生の短期間での変化には、満洲事変勃発による世相の変化（後述）と後宮らとの接触が大きく影響したように思われる。平生の伝記では、軍人たちとの接触で「後宮大佐によつて代表せられた少壮軍人の率直な態度に好意を寄せ始めた」と書かれている。⁶⁶

話を元に戻すと、平生の質問に対して阿部は、前者については「如何にしても如此く事態が発生せざるよう外交手段に依らざるべからず」と答え、後者に対してははっきりとは答えなかったようである。

このような阿部の態度から、平生はこの日の会合について、「一師団長とて中央幹部の意見は詳知せざるか、知り居るも言を之に托し明答せざるか。要するに今回の会見も十分要領を得ざりき」であったという感想を書

いている。⁶⁷

その後、阿部が台湾軍司令官に転任するというので、軍縮促進会のメンバーが送別会⁶⁸を開いたのであるが、そこで陸軍側から、阿部が去って後任の寺内寿一が赴任しても、引き続き会合を行なうことを求める声が出た。それに対して民間側は、阿部の転任を契機に会合を廃止する意向であったのだが、平生としては「我々軍縮を標榜し真に国家の財政に順応して国防を調節せんとする者としては忌憚なく談論し得べき軍人と会合することは相互の誤解を無にし各自の立場を表明し、また専門的知識の交換をなす上に於ても有利と思へば、軍部側に於ても希望するとせば存続するを可と思」ったのであった。⁶⁹

この両者による会合は、いつの間にか「軍事研究会」と呼ばれるようになっていた。この会の参加者であるが、軍縮促進会の側は「時によつて出席者の顔触れも人数も違つたが、概ね高原操、高柳松一郎、森平兵衛、安宅彌吉、河田嗣郎、田附政次郎、阿部房次郎、高石真五郎、平生釵三郎」であった。⁷⁰

このような関西（大阪）の財界人との集まりについて、元陸軍第十五軍司令官で、寺内第四師団長の幕僚であった飯田祥二郎は、「大阪は関西方面経済界の中心であるから、軍部との連絡の意味合から、師団を軍部の代表と看做し、両者首脳が絶えず会談を催していた。それ故師団長（寺内一正田）はこの意味で適材を選定されており、また広報宣伝等のため特種機関を司令部内に設けるなど、陸軍省でも特別の配慮を怠らなかつたようである」と回想、「大阪市民」の態度については、「景気の良い時は有頂天となり、軍部など眼中にない時もあったが、満州事変が勃発するや、俄然軍部の勢が盛んとなり、市民は掌を返すように軍部を謳歌し、師団の対外宣伝も一段と力が入るようになった。当時大阪市内の各デパートは軍関係の催し物をやり、軍の協力が引張り風であるような時節もあった。」と批判的に論じている。⁷¹

事変勃発後の「謳歌」に関して、憲兵の資料では次のように論じられて

いる。

「数句に亘る軍部の国防思想普及講演は著々其効を収め滿蒙の權益擁護並に日支問題に対する一般の関心は日毎に昂まれる折柄滿洲事変勃発の報伝り支那を膺懲するには絶好機なりと叫び今や地方一般の輿論は此の際日支問題を一挙に而も根本的に解決すへしとの強硬論をなすもの多きに至れり

而して曾ては軍部の措置に共鳴せさりし民政系にありても最近府県會議員選挙演説等に於て盛に滿蒙問題強硬論を主張するに至り又我国現下の經濟不況の打開策は一に軍備縮^(ママ)少に依るの外なしと主張し来りし地方財界の有力者団体或は無産黨員等も態度一変し軍部の積極的態度を容認するに至り極端なる左傾分子或は一部政党関係者を除き一齊に軍部の措置に共鳴せしむるに至れり」⁷²

そして、社論で「一貫して軍備縮小を主張し」、⁷³軍部から「従来社説其他に於て国家財政的立場より常に軍縮論を強調し殊に編集局長高原操、論説委員たる調査部長藤田進一郎、経済部長和田信夫等は其の色彩最も濃厚なるものとして注目」されていた大阪朝日新聞社も社論を転換した。一月一二日に開かれた大阪朝日の重役会議において、「大阪朝日新聞社今後の方針として軍備の縮小を強調するは従來の如くなるも国家重大時に処し日本国民として軍部を支持し国論の統一を図るは当然の事にして現在の軍部及軍事行動に対しては絶対批難批判を下さず極力之を支持すべきことを決定」したのであり、翌日には高原がこの決定を「編集局各部の次長及主任級以上約三十名を集め」て「示達」した。これに対して「言論界として外務省の如く軍部に追隨する意嚮なるや等の質問」があったが、高原は「現時急迫なる場合微々たることを論争する時機にあらずと一蹴」したのであった。⁷⁴滿洲事変勃発の反響は大きかった。

七、責任転嫁による対外膨張容認

前述の阿部の送別会で平生は、陸軍側の出席者三人の中で「英気尤も澁刺たる」後宮に対して、自身の次のような考えを述べたのであった。

世界の大勢が自給自足より進んで鎖国的傾向を帯びてきており、各国が共存共栄の心理を無視し、「我慾我利の主張」に固執してそれを実行するのであれば、日本のように天然資源が乏しく、人口が稠密な国柄では到底自立自存が不可能なので、「鎖国時代の昔に戻りて領土拡張を以て国運の隆昌、国家の発展を図らざるべからずと思」う。自分は自由通商主義を唱え、国家間においても通商の障害を撤廃または低減し、平和的な手段で国運の進展を図り、国民の福利の増進を希望することは人後に落ちないのだが、「世界の各国、殊に富強国が相率ひて」これと正反対の方針を執るのであれば、領土拡張によってその目的を達成するのもしやむを得ない。そうしなければ日本は生存不可能である。欧米の先進国が平和的な手段での生存を防止しようとするのであれば、我々は武力をもってこの目的を達する以外にないのである。「領土拡張の外他に手段なし」。

日本が満蒙を附属国か保護国とし、その産物をもって日本の生存の役に立たせる、このために武力を用いることは勢いやむを得ないのであって、欧米諸国がこれに干渉する権利はない。もし日本の行動に対して不満なのであれば、「先決問題として彼等は其境土を開放して人類の自由移動を許すか、物資の自由移動を認むるの外なからずや」。それを好まないのであれば、彼らに利害関係のない満蒙占領に「容喙するの要何処にある」。この理由から日本は正々堂々と各国に声明を出し、一時の面目を良くするための「偽善的口実を解消」すべきである。⁷⁵

ここで平生は欧米諸国に責任を転嫁することで、膨張主義を「止を得ず」⁷⁶正当化したのだが、これを聞いた後宮は大いに喜び、「かかる徹底せる議論は何人よりも耳にせず、実に正論なり、故に之を宣伝して以て欧米人の専恣なる意見を排斥したし」と述べたのであった。⁷⁷

この点、上田貞次郎（東京商大教授で東京自由通商協会の中心人物）も満州事変が日本で支持された理由として「外国で移民を入れず、商品にも関税をかけるから日本は遂に領土拡張に出た。意識的又は無意識的に人口の圧力を感じてゐるのだ」と論じているのだが、⁷⁸だからと言って満州事変を支持したわけではなく、「満洲を取てこの問題が解決されはしない。^(ママ)……満蒙の利権を得て南支の販路を失ふ如き事あらば差引非常の損失といはねばならぬ」と述べ、⁷⁹さらには「陸軍の条約無視は外交上危険だと考えて反対」した上田は、一九三一年一月には平生に対し、「満蒙進出論に反対を唱えて見たい」と述べたところ、平生から「それは危険だからやめろ、君の生命位では食止められぬ」と引き留められていた。⁸⁰平生が引き留めたのは後宮ら軍人をよく知る故であろうか。

また上田は、勃発から二年後の一九三三年九月九日の日記でも「日本軍の満洲占領は余の最も不快とするところであつた。……満洲そのものは日本人の移住に適せず、資源もさまで大なるものはないのに兵力を以てこれを占領すれば非常な費用を要し、又他の方面における日本人の海外発展を妨げるから、よいことは一つもないと考へた。」と述べていた。⁸¹

そして、上田と同じく東京自由通商協会の志立鉄次郎も、満州事変に対して批判的であり、⁸²自由通商という共通項があつたとはいえ、平生とは異なっていた。

八、後宮淳・平生の「意志の疎通」と既成政党の腐敗

阿部の台湾への転出後、後宮参謀長も一九三二年二月より関東軍司令部付兼満鉄嘱託⁸³として満州へ赴任することになったのだが、そこで平生は後宮に次のような手紙を書いた。

「拜啓^(ママ) 切角御心易くなり互に胸襟を開きて国事を談ずることとなりましたのに、忽ち袂を分つこととなりまして如何にも御名残惜しく存じます。しかし今回の御栄転は、軍部がこの国事多端の時に於て適材を適所に配す

るもので、君国のため真に機宜の処置と喜ばざるを得ません。貴下が過去の歴史に於て得られたる満蒙に関する該博なる知識と貴重なる経験を以て、満鉄運輸他の事務を管理統御せらるるに於ては、独り軍事上の便宜は勿論経済的利益も多大ならんと思ひます。どうか御自重下され、邦家のため献身的の御努力と御成功を祈ります。何れ尚拝顔の機会もありますと考へますが、取敢へず御喜を述べます。」⁸⁴

この手紙を読んだ後宮は、二月九日⁸⁵に開かれた後宮の送別会において平生の手を握り、「先日君が送りし手紙は実に感激せり」、「普通の栄任を祝するの意味を以てする月並式の挨拶にあらずして、憂国の心裡より溢れ来りたる真情は感激の外なし」と大いに喜んだ。これに対して平生は「真に国を思ふ壮年士官の偽らざる告白を見て、涙胸に迫るを覚へた」のであった。⁸⁶

そして平生は、軍事研究会の意義について、次のように述べている。

「後宮氏が我軍縮促進会の幹部に会見を求めて、互に理解するの機会を作りたるは九月十八日の午後にして、満州事件は其夜九時の出来事なりしは奇といふべきか。後宮氏は大阪に於ける有力なる実業家をして軍部の真意を知らしめ、且進んで軍部も財政経済的知識を得んと企てたるものなるが、この計画は図に当たりて互に胸襟を開きて談論するを得る機会を重ぬるに従ひ、意志の疎通が満足に行はれんとするに至りたるが如し。氏は去る十月十七日東京に於てクーデター（十月事件⁸⁷のこと—正田）を試みんとせし軍部の少壮将校と気脈を通ずる一人にして、満州軍にある石原中佐、板垣大佐なども其一味なるが如し。」⁸⁸

このように平生は軍人からの接近を契機に、彼らとの「意志の疎通が満足に行はれ」たことを喜んでいたのであった。

その後平生は後宮に次のように話した。

今や立憲政治は腐敗の極に達している。現在総理大臣である犬養毅自ら、我が国の政党は政権争奪の団体であると自白しながら、平然として「首相の印綬を受けて」いる今日、このような党人に政治を委任するのは実に危

ないことである。であるから、第二の維新は「遠からず至らざるべからず」。これは明治維新とは違い、血を流したり国民に塗炭の苦を与えたりすることなく「平穩裡に解決せん」。そのためには純真な「intelligentの少壮者と小壯軍人と結托」し、それに加えて「報国尽忠の念熾んなる実業家を以てせざるべからず」。こうして「智力も知識も資力」も「充実してこの革命を執行するを得んか」。

これに対して後宮は、「然り、四百余名の代議士を一挙に捕獲するは容易なり、如何なる革命も資力なくして実行せらるるものにあざれば、実業家中真に君国のため犠牲を払はんとする人々の加盟を要するなり」と答えたのであった。

これを聞いた平生は、「実に頼母しき軍人といふべきか。余は如此き純真にして愛国の熱誠を以て終始せんとする軍人が、実業家と結托して事を挙げんとする事に心付きしは、真に快心の事といふべしと思ふ」と記している。⁸⁹

さらに後宮について後日、「軍人ながら中々智謀に富み経営の才もあり機変にも通じ円転滑脱の点もあり。しかも野心満々たる軍人なれば満州に於て活躍せしむるには適當の人物ならんも少しく自己の才幹を頼み過ぎるの欠点なきにあらず。左れば上司たるものが聡明にして気魂剛なる人にあざれば彼をして横暴専恣ならしむるの恐なしとせずと思ふ。」とも論じている。⁹⁰

このように平生は、後宮を少し危なっかしく思いつつも、軍人と結託して起こすという第二の維新について話し、さらに後宮が代議士を「捕獲」するのは容易だと述べたことを評価したのである。政党人への失望があったとはいえ、ここで平生は政党政治を否定しているのである。

実際、一九三三年八月一四日に書いた後宮への手紙の中で、「日支満の経済ブロック」のような「国家的大策」を遂行するには、軍部を首班とする「国家本位の内閣を以てし真に昭和維新の実を挙げんこと」を希望し、さらには五・一五事件に関与した青年将校については、彼らの「赤心や誠

に嘉すべく其真情や真に愛すべきものがありますが、何分にも思慮浅薄にして大事をなすに足り」ないと思うと同情的に論じていた。⁹¹

このように平生は政党政治を否定したのだが、これについて、品川白煉瓦株式会社社長や東京電力株式会社社長・会長などを歴任した財界人の青木均一は次のように論じている。

「当時、軍のやり方に対し財界人が大きな抵抗をせずについて行った理由の一つは、政界がすっかり腐敗していたことによると思う。政友会でも憲政会でも、利権のある方にころりと鞍替えしたり、政権争奪のために悪いことを平気でしたりしていたことは、国民の目や財界の目にも明かであった。これは、今でもいえることだが、国の政治が一番大切なことであるのに、それが墮落しきっていた。これに対して、軍は初めは国家を中心に考えていたし、やることもきれいなので、財界も国民も軍にはなんか清潔なものを感じさせられた。これも最初のうちだけで、日支事変後はだんだん駄目になったが……^(ママ)。それで、軍のやり方もまあ止むを得ないという気を起こさせたのである。」⁹²

これが平生にも当てはまることは、後宮との交流からも明らかである。少し後になるが、満州事変勃発から四年後にも平生を憤らせる次のような出来事があった。

一九三五年一月に平生は貴族院議員に勅選されたのだが、その際民政党の町田忠治や川崎卓吉が勅選奏請の尽力に対する代償を要望したのであった。当時は岡田啓介内閣で、この内閣を評価していた平生は、この内閣を支える民政党の議員を多数当選させるのは必要だと考えた。だからその費用として寄付することは拒むところではなかったが、しかしこの寄附と勅選議員を関連させることは断じて容認できなかった。しかも寄付した三万円では満足しなかった町田らは「醸金を執拗に要望した」のであり、平生は「如何にも政党根性を曝露せしものにして不快此上もなければ、此の際、彼等をしてかゝる陋劣なる意志より離脱せしめ、此の問題を一時に解消し、勅選前の状態に復帰せしむるの外なしと考へ、夫には相当纏りた

る資金を投与するの外なしと決意したり。かくして、陋劣なる党人との関係を解消し、単に友人としての交際に帰らんとす。かゝる野鄙にして党利の外なき人々によりて国政が変理せられつゝある事は、決して邦家のために好ましき事にあらず」と憤っていた。⁹³

なお、憲政の神様として知られる尾崎行雄は、一九四一年の第七六帝国議会において、「我国の政党は、主義政策に由て団結したのではなく、利害や感情に依て、集合したものであつて、真誠の政治団体ではない……今日でも尚ほ封建時代に於ける君臣の関係や、博徒間の親分子分の関係に於て、行はれたところの思想感情に由て、支配せられるものが多い。換言すれば、名は政党であつても、実は徒党に過ぎないのだ。」と論じ、さらには尾崎が政党に所属していた際、尾崎以外の政党人は「主義方針よりも、親分子分の関係に重きを置」いていた、彼らは「どうしても政党を理解し得ない」、だからこそ「党のためには、悪事もするし、賄賂のやり取りもする」と非難していた。⁹⁴

平生を陸軍に接近しやすくする環境を作った既成政党は非常に罪深い。

さて、平生と後宮の関係に戻ると、時には平生の方が後宮よりもストレートに論じることもあった。平生は満州から一時帰国していた後宮に対し、持論である「満蒙委任統治論」を提議したのだが、それは、「国際連盟より脱退し経済断交を甘受し米国と一戦を交ゆるは今日こそ好時期なりと揚言する軍部の人々が何が故にcamouflageに類する満州国の如きものを創設して後日に累を残」そうとするのか。外交上の辞令を清算し、満蒙こそ日本の生命線なので、日本の勢力下に置く必要があり、それは日本のためにも「満蒙人」のためにも利益となるので、なぜ委任統治を承認すべきだと「大胆に」提議しないのか。中国の照会に対し、日本は満州国には関与しないなどと「見透きたる虚言を發するが如き、皇国の外相として如何に心苦しき事なるや。実に日本の恥辱である。言行一致は我国建国以来の国是」ではないのか。⁹⁵

これに対して後宮は苦笑し、「孰れ女と同衾せしとき女房が之を發見し

たるときに之は自分が招きたるにあらずしてこの女が寢床に入り来りたりといふの外なからん」と答えたので、平生は「かかる事は夫に忠実なるか甘き女房なれば信ぜるも他人はかかる言を信ずるものあらざるべし。仁義を以て標榜せんとする皇国がかかる馬鹿々々しき言辭を以て國際連盟国に臨むが如きは自己陶醉の甚しきものならずや。何故にかかる虚偽の言動をなすの要あらんや。皇国の軍人たる者は正義公道に依つて行動するこそ望しく思ふが如何」と再び尋ねたので、「三氏（後宮、「中村少将、井関参謀長」のこゝ一正田）共に平生氏の持論は賛成なるも今更致方なしと言ひ、一日も早く満州国の如きものは自然消滅せしむべく努力あらんことを希望すと。安宅氏は平生君の如く単刀直入には行かざるべしと。一坐哄笑」。⁹⁶

九、寺内寿一と平生

平生らは一九三二年二月二五日、新しく第四師団長となった寺内に招かれて会食したのだが、それは「満州出征の皇軍慰問のため同地に赴かれたる陸軍中將和田亀治氏を主賓とし」、寺内が大阪の実業家を和田に紹介するためであった。^{97 98}

その席上、和田が持ち出したと思われる、満蒙へ日本人を移住させるべきだという議論について、平生は、北海道や台湾、ブラジルなどへ日本人を移住させるのが困難だったことを挙げて、「満蒙移住が容易なりと考ふるは錯覚である」と述べて反対し、寺内も平生に同意した。

その後話は「満蒙新国家」のことに移ったのであるが、平生は「満蒙新国家」における教育制度について次のような考えを披露した。

「満蒙新国家は日本が日本の利益を第一とし之を利用せんと意なれば、教育制度を朝鮮か台湾の如くすることは大なる誤である、教育はなるべく低級なるを要す、日本の指図の儘に満蒙三千万人を懐柔し之を使役せんとせば、専制政治に於ける教育制度を用ゆるべく、教育は住民の要求を待つて之を施行すべし、精神的の教化を施すよりも先づ以て物資的慰安を与ふ

ることを専一とすべく、左れば教育は郷に在つて郷に従ひ、彼等の習慣を重んじ彼等の風俗、伝統に適合する初等教育を以て満足すべきなり、中等以上の教育は当分差控ふべきなり、満蒙の日本化なしとし、文化の恩典に浴せんとする如き制度は大に慎むべし」⁹⁹

平生は寺内に対して自身の率直な考えを述べたのだが、これは平生が、前述のように、満州を領有あるいは委任統治することを目指していたからである。「見透きたる虚言」を並べて傀儡国家の満洲国を樹立するのではなく、内地に役立てるために日本が堂々と領有・支配するということであった。

別の機会に、平生は寺内に次のように述べている。

日本は過去の歴史において附属国を統治すべき方針を確立しなかったため大きな過失をなした。今また満州で同一の過失を繰り返そうとしている。実に嘆かわしいことだ。満州を日本の生命線とするなら、満州の占有は日本のためであり、満州の統治も経営も日本の利害を第一とすべきである。にもかかわらず、満州国にいる日本人は日本の利害を顧みずに満州本位に傾こうとしており、大いに戒めるべきだ。これは日本の対満方針が確立しないためであり、確立する必要がある。そうしなければ軍部がなした苦労や努力も水泡に帰してしまうのであり、そうなってしまうことを恐れる。¹⁰⁰

これを聞いた寺内は平生の意見に共鳴し、「軍部上局に進言しつつあり」と答えたのであった。¹⁰¹

そして平生には次のような中国人観があった。後に満洲国のことを例に挙げて、「日本の国体の有難さとか、皇道精神とか、そう云つたものを支那人に理解させようとしても、それは無駄だ」、中国人は「支配者が誰であらうとも、自らの安居楽業さへ保証されれば、我不関である。¹⁰²そう云ふ国民に遠く神代の昔より皇統連綿たるわが皇室の有難さなどわかる筈がない」、にも関わらず「どうも日本人は、自分等がよいと思ふことは、誰にでも推しつけたがつていけない。」と述べているのだが、¹⁰³これが、平

生が「満蒙の日本化なし」とした理由の一つである。

そして、一九三二年八月六日に真崎甚三郎参謀次長が大阪に来た¹⁰⁴際、寺内は軍事研究会員を招いて「午餐の饗応」をし、和田に対してと同様、平生を真崎に紹介したのだが、¹⁰⁵この時平生は真崎に対して怒りを覚えたのであった。それは話題が「満州問題」になった時である。前述のように平生は、真崎に対しても、日本の生命を維持するために満州を所有すべきである、我が領土とするのが面白くないのであれば「欧州大戦後ヴェルサイユ条約に依り發明せられたる新熟語、委任統治 (Mandate) に依りて領有」すべきだ、満州国のようなカモフラージュは必要ないと述べたのであったが、それに対して真崎が、「若し広大なる満州を我領有とせば之れが治安を維持するには二十個師団の兵力を要す、かかる大兵を満州に駐屯せしむるの実力ありや」と答えたので平生は、「かかる広大なる領域にある馬賊兵匪を一気に平定せんとすることは不可能ならんも先以て主要なる都市村落の治安維持を主とし、一方交通機関の完成に努力し一歩々々進むこととするも晩らずつと思ふ」と述べたのであった。平生が言うには、当時の新聞報道によれば、¹⁰⁶真崎は一ヶ月前に満州からの帰途、満州における「兵匪土匪馬賊」は今年中には平定すべきだと述べたのであり、それとこの日の発言が「大相違」であって「実に機に依じて場当りの言論を弄して国民を欺瞞せんとする如き実に許すべからざることなり」と怒りをあらわにしたのである。¹⁰⁷

この真崎批判の中で、平生は満州への派兵について次のように論じている。

「今日の満州国が自力を以て治安を維持することを得んか、真崎次長の言も首肯するに足るも満州国には何等の実力も有せず何個師団といへども必要なる兵力は我国が供給せざるべからず、左れば満州国が存在せると否とに拘はらず必要なる兵力は之を我国より派遣駐屯せしめざるべからざるにあらずや。」¹⁰⁸

かつて軍縮を唱えていた平生は、ここにきて満洲への派兵を求めるまで

になっていた。

そして平生は、軍事研究会結成一周年を記念して集まった際、寺内に対し、他民族をどう扱うべきかについて次のように述べた。

他国の民族を征服することは簡単であるが、彼らを永久に懐柔・同化することはほとんど不可能である。「其国を永久に領域となさんには其民族を絶滅せしむること、我皇祖神武天皇が我旧日本の住民たる熊襲其他の種族を絶滅せられたると同一の挙に出でざるべからず」。しかし二千万人の「鮮人」、三千万人否将来無限に増加しようとする「満支人」を殲滅することは到底不可能である。なのでこの「満鮮人五、六千万人」をコントロールして「我国の附属たらしむる」ためには実力で抑圧し、彼らが台頭して反抗するのを不可能にする以外にない。日本の実力如何によって、彼らは独立運動を企てて日本の束縛を脱することを試みるだろう。第一次大戦当時、オーストリアに「国難」が発生するや、「チエコスロヴハキア族」はロシア軍に降って鋒を逆にしてオーストリアに敵対した。故に日本が満州国を独立させ、我が勢力範囲に置いた以上、日本は新たに重大な責任を負ったのである。国民はこれを覚悟して国力の増進に努め、常に挙国一致で実力の涵養を心掛けるべきである。

しかし政界の現状は「私利を専らとする党人が跳梁し真面目なる人士は沈黙して形勢を觀望」しており、軍部がこの状勢下に、「政界の際物師の如き人物を信用して威力を以てかかる人物を勢援せんとするの嫌あるは大に慎むべきものと思」う。軍部の人びとも徒らに満州での成功に酔って軽挙妄動しないことを望む。真に国家を憂うのに「遠謀深慮あらんことを祈らざるを得」ない。¹⁰⁹

ここでも平生は政党への不信感を顕わにしている。

さて、和田や真崎を平生らに紹介した寺内は、一九三三年五月六日の荒木貞夫陸軍大臣の来阪時¹¹⁰にも、平生を含めた大阪の著名な実業家約二〇人を紀州御殿¹¹¹での午餐に招き、荒木に紹介したのであった。¹¹²前述の飯田が回想しているように、寺内は第四師団長に期待されていた役割（大

阪財界とのパイプ役)を果たしていたのである。

平生は一九三二年八月八日の自身の日記に、「寺内師団長が近来時々大阪クラブに來り会員と交を結び大阪に於ける実業家の偽らざる告白を聴き腹藏なき論議を耳にすることは実業界とは無縁にして其内情に通ぜざる軍人の為めには真に悦ぶべき事なるのみならず実業家も亦軍部の内情を知るの機会を得て互に益する処少々ならざるを信ず。寺内氏が進んで脩(ママ)を作るに至りたることは大阪人の為め大に喜ぶべきことと思ふ、今後この慣例はたとえ師団長の更迭あるも継続せられんことを望むなり。」と書いているのだが、¹¹³「交を結」ぶことに積極的な陸軍との接触に大変満足していたことが窺われる。

一〇、むすびにかえて

これまで見てきたように、関西財界人の平生は当初、当時の輿論と同様に軍縮を主張し、経済更新会や軍縮促進会を結成するなどしていた。そんな平生に目を付けたのが陸軍第四師団であり、彼らは平生に接触を図って軍事研究会を開催するなどし、濃厚な関係を構築していった。

第四師団が平生に接近した時期は、終わりに近づいていたとはいえ、まだ「憲政の常道」期で、「全國民の代表者」¹¹⁴(とは言っても、周知のように女子は排除されていたが)である議会で議席を有する既成政党が内閣を組織していた。さらにはこの時軍部大臣資格は予備・後備役まで広げられていた。

しかし、そのような状況下で、第四師団は軍縮という輿論や政党内閣に従うのではなく、逆にそれらに抗う意図で平生に接触した。満州事変勃発後に世相が変化したことも一因ではあるが、その接近によって陸軍の思惑どおりに平生は変化していき、後には東條内閣の財界での支柱になるなどしたのであった。

では、第四師団はなぜ平生と密接な関係性を持つことに成功し得たのか。

正 田 浩 由

その大きな要因として、既成政党の腐敗があった。前述のように、議席を有する既成政党は民意が反映された存在のはずであった。しかし、それとは大きく異なる政党の党利党略が平生に与えた失望が、心易く互いに胸襟を開いて国事を談ずるような後宮との関係性をはじめとする、陸軍との鞏固な結び付きを齎したのであった。

軍縮の空気の中でも、陸軍は着実に自身の考えを実現すべく行動していた。平生への積極的な接触はその表れであった。

【謝辞】 本稿は、二〇二二年一〇月一六日開催の第四六回諜報研究会（インテリジェンス研究所主催、早稲田大学20世紀メディア研究所共催）で報告した内容に加筆・修正したものである。報告の場をご提供くださり、また満州事変後のメディアに関するアドバイスもして下さった山本武利先生に感謝申し上げます。なお、文責が正田にあることは言うまでもありません。

-
- 1 『関西財界先人十傑』（大阪実業教育協会編、桐陰堂書店、一九五七年）では「十傑」の一人としてその名を連ねている。ちなみに、平生以外の「十傑」は、阿部房次郎、古田俊之助、弘瀬助太郎、稲畑勝太郎、菊池恭三、武藤山治、野村徳七、野口遵、大原孫三郎。
 - 2 『東京朝日新聞』一九三八年八月七日朝刊。
 - 3 拙稿「北支那方面軍経済最高顧問平生鈺三郎と経済委員会・日華経済協議会の発足」（『早稲田政治公法研究』第九三号、二〇一〇年、早稲田大学大学院政治学研究所、所収）参照。
 - 4 拙稿「近衛新体制から翼賛選挙に至るまでの議会と政党政治家の動向」（『早稲田政治経済学雑誌』第三六九号、二〇〇七年、早稲田大学政治経済学会、所収）参照。
 - 5 中林貞男『翼賛選挙の一断面』『資料日本現代史月報』（吉見義明・横関至編集・解説『資料 日本現代史4 翼賛選挙①』大月書店、一九八一年、の付録）所収、四頁。
 - 6 『朝日新聞』一九四五年一月二九日朝刊。
 - 7 『日本陸海軍総合事典[第2版]』（秦郁彦編、東京大学出版会、二〇〇五年、二七頁）によれば、後宮が軍務局長になったのは一九三七年三月であり、この時は陸軍省の人事局長であった。
 - 8 吉野信次『商工行政の思い出——日本資本主義の歩み——』商工政策史刊行会、

一九六二年、三〇九—三一〇頁。

- 9 額田坦『陸軍省人事局長の回想』芙蓉書房、一九七七年、四〇五頁。同書では後宮について「知略縦横、政治力があり、後年なお老青年の観があった」と論じている（四〇四頁）。
- 10 「人物紙芝居」『文藝春秋』一九三八年五月号、所収、二八五頁。
- 11 青山謙介『文部大臣平生鈺三郎とはどんな男か』第百書房、一九三六年、二三頁。
- 12 原田熊雄述『西園寺公と政局 第五卷』岩波書店、一九五一年、一七九頁。
- 13 同上、一八四頁。
- 14 河合哲雄『平生鈺三郎』羽田書店、一九五二年、七七九頁。
- 15 水澤謙三「父の手紙」津島純平編纂『平生鈺三郎追憶記』拾芳会、一九五〇年、所収、一五〇—一五一頁。
- 16 前掲「翼賛選挙の一断面」『資料日本現代史月報 第4巻「翼賛選挙①」付録』所収、四頁。なお、一九三九年四月四日の『平生鈺三郎日記』（以下『平生日記』と表記。これは平生鈺三郎の日記であり、甲南学園が所蔵している。閲覧させていただく際に便宜を図ってくださった大野愛子さんに感謝申し上げます。なお、現在は出版されている（甲南学園平生鈺三郎日記編集委員会編、全一八巻、甲南学園。）では次のように書かれている。
「太田原造（平沼総理秘書官）氏来訪し総理の使者として今回内閣強化のため通信拓務両省大臣の補欠をなすにつき余に入閣を勧誘するためと来意を告ぐ、余は之に対し通信といひ拓務といひ余に取りては体験も知識も乏しき省にして果して省務を完全に処理するを得るやは甚だ自信なきものである、余は自信なき業務には就かざることが主義であると告げたるに、太田氏は通信省には船舶管理の任あり拓務には海外移民の仕事あり、両省共に余の過去に於てまた現在に於ても無関係にあらざり、且閣僚は独り主管事務のみならず総理を扶けて国政に参与するの責任あるものなれば他省の事務といへども自己の所信を陳べて国政の嚮理に当ることは当然なれば國務大臣としては其間何等の軒輊あるにあらざりと。余は直ちに謝絶せんかとも考へたれども切角の推薦勧誘なれば一考すべしとて分る。」
- 17 拙稿「二・二六事件後の陸軍の政治進出」（『早稲田政治公法研究 第八八号』早稲田大学大学院政治学研究科、二〇〇八年、所収）参照。
- 18 『讀賣新聞』一九三七年一月二九日朝刊。
- 19 JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A03020021700、「御署名原本・明治二十一年・勅令第二十七号・鎮台条例廃止、師団司令部条例制定」（国立公文書館）。
- 20 伊藤隆監修・百瀬孝著『事典 昭和戦前期の日本 制度と実態』吉川弘文館、一九九〇年、二九四—二九五頁、二九七頁。
- 21 前掲「御署名原本・明治二十一年・勅令第二十七号・鎮台条例廃止、師団司令部条例制定」。
- 22 美濃部達吉によると、軍隊の統帥権である「軍令権の作用は一般の国务上の作用とは区別せられて居って、……軍令権すなわち軍隊統帥の作用については、天皇が軍の大元帥たる御地位において行わせられるのであって、国务大臣の輔弼のほ

- かにあり、国務大臣はこれについてその責に任じない」。しかし、「軍備を維持するがために臣民に向って命令を為し国費を支出する等の権を謂う」軍政権に関しては、「一般の行政作用と同じく国務大臣の輔弼を要し……その費用については一般の歳入出の予算と同様に議会の議決を経なければならぬ」（美濃部達吉『憲法講話』岩波書店、二〇一八年、九三頁）。
- 23 例えば、原田敬一編『地域のなかの軍隊 4 古都・商都の軍隊 近畿』吉川弘文館、二〇一五年。
- 24 滝口剛「自由通商運動と満洲事変」『阪大法学』第64巻第3・4号、大阪大学法学会、二〇一四年、所収。
- 25 『東京朝日新聞』一九二九年一月九日朝刊。
- 26 『大阪朝日新聞』一九三〇年六月一八日夕刊。
- 27 『東京朝日新聞』一九三〇年六月一九日夕刊。
- 28 原田熊雄述『西園寺公と政局 第一巻』岩波書店、一九五〇年、九八頁。
- 29 『東京朝日新聞』一九三〇年六月一九日朝刊。
- 30 若槻礼次郎『古風庵回顧録』読売新聞社、一九五〇年、三六一頁。
- 31 堀真清『西田税と日本ファシズム運動』岩波書店、二〇〇七年、三八九頁。
- 32 前掲『平生鈇三郎』や前掲『平生鈇三郎追憶記』所収の「年譜」を参照。
- 33 鈴木茂三郎『財界人物読本』春秋社、一九三七年、一五頁。
- 34 JACAR Ref.A03021497800、「御署名原本・大正十三年・勅令第八十五号・文政審議会官制」（国立公文書館）。
- 35 『大阪朝日新聞』一九二九年一月二八日朝刊。
- 36 前掲『平生鈇三郎』六四七頁。
- 37 『東京朝日新聞』一九二九年一〇月二七日朝刊。
- 38 前掲『平生鈇三郎』六五〇—六五一頁。
- 39 『東京朝日新聞』一九二九年一月二八日夕刊。
- 40 『大阪朝日新聞』一九二九年一〇月二七日朝刊。
- 41 甲南学園編『平生鈇三郎講演集——教育・社会・経済——』一九八七年、一九一—一九二頁。
- 42 前掲『西園寺公と政局 第五巻』（二二頁）によれば、廣田弘毅内閣の文部大臣をどうするかという時に、廣田は「岡部氏はしきりに平生氏を勧めてゐる。陸海軍も『岡部氏の薦める平生氏ならいゝ』と言つてゐる」と原田に話していた。岡部は旧岸和田藩の藩主の家柄で、平生の義父である平生忠辰は旧岸和田藩士であった（前掲『平生鈇三郎』参照）。
- 43 『平生日記』一九三一年九月一八日。
- 44 この結成について、一九三一年一月二〇日の『東京朝日新聞』朝刊では「日本の軍事費は世界無比の高率 軍縮国民同盟の決議」という見出しで、次のように報じている。
- 「尾崎行雄、新渡戸稲造、志立鐵次郎、関直彦、田川大吉郎、清瀬一郎諸氏の発起になる軍縮国民同盟は十九日午後二時から丸之内日本クラブに発会式を挙げ関直彦氏を座長に推し田川大吉郎氏開会のあいさつを述べ左の決議を満場一致可決

し尾崎、新渡戸、志立諸氏の演説があつて五時散会」

さらに同じ紙面では、次のような「決議要旨」を紹介している。

「決議要旨

吾人は今日の急務、軍縮に過ぎたる大事は無いと思ひ、本同盟を組織するのである、本年の予算を見るに、陸海軍費は多少節減せられたるも、尚かつ三億九千八百余萬圓、総予算の約二割七分を占め、実に世界大國中、無比の高率である、若し恩給費の軍人に関する約一億圓、国債利子の軍事に關係ある約二億圓を加ふれば、概算七億圓、総歳出のほとんど五割弱となるのである、その編成の過大、分配の不公平なるや言を待たない、軍備の縮小はこの過大不公平の弊をたゞすのである、しかのみならずその中には負担軽減の資源があり、悪況打開の計画があり国運進展の方策があり、進んで世界と共に世界の平和を強保する経りんもある正に我が国家最高の政策である、もつとも、国軍の規模を如何なる程度に縮小し、幾何の経費を削減すべきやに就いては、吾人は唯いふ、防備の計画を旨とし、最小限度に縮小せんことを期す、その実際の方法は、諸君と共に近く集會を催し衆議を尽して協定すべきであると、切に諸君の和協□□を仰ぐ所以である」

- 45 前掲『平生鈔三郎』六五二頁。
- 46 『大阪朝日新聞』一九三一年三月四日夕刊。
- 47 前掲『平生鈔三郎』六五三頁。
- 48 JACAR Ref.C15120133700、「憲高秘第四三六号 軍縮及反軍縮運動狀況ニ関スル件報告（通牒）昭和六年九月四日」（防衛省防衛研究所）。
- 49 JACAR Ref.C15120134000、「憲高秘第四四一号 露西亞ノ産業五ヶ年計画ニ対スル軍部ノ觀察ニ関シ軍縮國民同盟ノ反戰的態度ノ件報告（通牒）昭和六年九月五日」（防衛省防衛研究所）。なお、原文の片仮名は平仮名に改めた。以下同じ。
- 50 JACAR Ref. C01001142000、「第四師団司令部ニ定員外人員増加配属ノ件」「陸軍省大日記 甲輯 昭和5年」（防衛省防衛研究所）。
- 51 同上。
- 52 秦郁彦編『日本陸海軍総合事典 [第2版]』東京大学出版会、二〇〇五年、参照。
- 53 『平生日記』（一九三二年九月一八日）でも、「後宮淳氏が肝煎とな」ったと記されている。
- 54 前掲『西園寺公と政局 第五卷』一四三頁。
- 55 『平生日記』一九三一年九月一八日。
- 56 同上。
- 57 前掲『平生鈔三郎』六五五頁。
- 58 朝日新聞百年史編修委員会編『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』朝日新聞社、一九九一年、三七六頁。ちなみにこの団体などによって八月一八日に開かれた講演會について、前述の「軍縮及反軍縮運動狀況ニ関スル件報告（通牒）」における「反軍縮運動ノ概況」で次のように報告されていた。
「聴衆約一千四百名弁士十余名何れも太平洋滿蒙問題の危機切迫せるを高唱して米、支 露の現状を説き軍備の必要を論して軍縮論者を排撃し聴衆に多大の感動を與へたり」

正 田 浩 由

- 59 前掲『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』三六九頁。
- 60 『東京朝日新聞』一九三一年九月二日夕刊。
- 61 同上。
- 62 『平生日記』一九三一年九月一八日。
- 63 同上。
- 64 「資料45 満洲事変に対する大阪財界方面の反響に関する件報告（通牒） 憲兵司令官外山豊造（一九三一・一〇・一）」藤原彰・功刀俊洋編『資料 日本現代史8』大月書店、一九八三年、所収、一四二頁。
- 65 平生は一九二八年一月一四日に発足した大阪自由通商協会の常務理事として、保護貿易や自給自足主義を批判し、「自由通商主義を鼓吹」していた（『大阪朝日新聞』一九二八年一月一五日朝刊）。
- 66 前掲『平生夙三郎』六五六頁。
- 67 『平生日記』一九三一年一〇月三〇日。
- 68 『高原操日記』では、一五日（『平生日記』）ではなく一四日となっており、「夜 阿部師団長、例の数名、阿部中将台湾栄転の説」と書かれている。なお、『高原操日記』は朝日新聞大阪本社社史編修センターに所蔵されている。閲覧の際、編修センターの後藤俊明さんと研究者の植木佳子さんには高原操についていろいろと教示いただくなど、大変お世話になりました。感謝申し上げます。
- 69 『平生日記』一九三二年一月一五日。
- 70 前掲『平生夙三郎』六五五頁。
- 71 上法快男編『元帥寺内寿一』芙蓉書房、一九七八年、一八七頁。なお、このような「大阪市民」をも含んだ「同時代の日本人の発想を代表する者とみなす見地に重点を置」いて、柳条湖事件から日本の国際連盟脱退通告までの徳富蘇峰の満州事変をめぐる言論を分析・考察したものとして、澤田次郎「満州危機をめぐる欧米との疎隔感と心理的葛藤」（澤田『近代日本人のアメリカ観 日露戦争以後を中心に』慶應義塾大学出版会、一九九九年、所収、第四章）がある。
- 72 「資料8 国防思想普及講演会の状況並其反響に関する件報告（通牒） 憲兵司令官外山豊造（一九三一・一〇・六）」前掲『資料 日本現代史8』所収、四五—四六頁。
- 73 前掲『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』三四七頁。
- 74 「資料27 大朝、大毎両社の時局に対する態度決定に関する件報告（通牒） 憲兵司令官外山豊造（一九三一・一〇・一九）」前掲『資料 日本現代史8』所収、九六頁。
- 75 『平生日記』一九三二年一月一五日。
- 76 同上。なお堀真清は、「被動者のかたちで機先を制す、やむなく先手をとるということ」が「日本近代史における政戦略の本筋」だと指摘、さらに満州事変についても「首謀者石原莞爾（関東軍参謀）によればやむなく機先を制した」と論じている（堀真清『近代日本の国家政治——ナショナリズムと歴史認識』早稲田大学出版部、二〇一五年、三一—四頁）。
- 77 同上。

- 78 『上田貞次郎日記 大正八年 — 昭和十五年』慶應通信株式会社、一九六三年、一六七頁。
- 79 上田正一『上田貞次郎伝』泰文館、一九八〇年、一九六頁。
- 80 同上、一九五 — 一九六頁。
- 81 同上、二一六頁。
- 82 広川禎秀「自由通商主義から領土拡張主義へ」岸俊男教授退官記念会編『日本政治社会史研究 下』塙書房、一九八五年、所収、五一—四頁。
- 83 秦郁彦『日本陸海軍総合辞典 第2版』東京大学出版会、二〇〇五年、二七頁。
- 84 『平生日記』一九三二年二月九日。
- 85 『高原操日記』では「後宮参謀長の迎送会」は二月六日となっている。
- 86 『平生日記』一九三二年二月九日。
- 87 十月事件については、前掲『西田税と日本ファシズム運動』を参照。
- 88 『平生日記』一九三二年二月九日。
- 89 同上。
- 90 同上、一九三二年四月一五日。
- 91 同上、一九三三年八月一四日。
- 92 日本工業倶楽部五十年史編纂委員会編『財界回想録 下巻』日本工業倶楽部、一九六七年、三四二頁。
- 93 前掲『平生鈞三郎』七四五 — 七四七頁。
- 94 罌堂尾崎行雄述『敗戦の反省』岩波書店、一九四六年、三〇 — 三一頁。
- 95 『平生日記』一九三二年四月一五日。なお、当初関東軍は満州領有を目指していたのであるが、陸軍中央の反対もあり、結局満洲国の建国となった(山室信一『キメラ——満洲国の肖像 増補版』中央公論新社、二〇〇四年、参照)。
- 96 『平生日記』一九三二年四月一五日。
- 97 同上、一九三二年二月二六日。
- 98 一九三二年二月二五日の『高原操日記』では「夜 和田陸軍中将 満州より帰る。寺内師団長の宴に臨む 中将善く語る」と書かれている。
- 99 『平生日記』一九三二年二月二六日。
- 100 同上、一九三二年八月六日。
- 101 同上。
- 102 満州事変を起こした石原莞爾や板垣征四郎もこのように認識していた(前掲『キメラ』五五 — 五六頁)。
- 103 平生鈞三郎「北支に就ての二三」『実業之世界』第四一巻第四号、実業之日本社、一九三八年、所収、一一頁。
- 104 『東京朝日新聞』一九三二年八月二日の朝刊によれば、「真崎参謀次長は本年度陸軍特別大演習地現地視察のため一日午後九時四十五分東京駅発列車で大阪へ向つた」。
- 105 『平生日記』一九三二年八月六日。なお、『真崎甚三郎日記 昭和七・八・九年一月～昭和十年二月』(伊藤隆・佐々木隆・季武嘉也・照沼康孝編、山川出版社、一九八一年)では一九三二年八月の日記は欠落している。

正 田 浩 由

- 106 平生がどの新聞を見たのか不明であるが、例えば『東京朝日新聞』一九三二年七月二日の朝刊（「満州の問題はあせるな 真崎参謀次長語る」）では、真崎が「匪賊討伐も九月頃にでもなれば前途の見透しが出来るやうにならう」と述べたことを報じている。だが『読売新聞』一九三二年七月一日の夕刊（「満洲国は未だひよっこ もつと気長に扱へ」）によれば、記者の質問に対して真崎は「土匪討伐を早くやれつて？庭のごみでも掃くやうに訳に行かぬ」と答えている。
- 107 『平生日記』一九三二年八月六日。
- 108 同上。
- 109 同上、一九三二年九月一日。
- 110 『東京朝日新聞』一九三三年五月七日朝刊では、「荒木陸相は六日午前九時四十分大阪駅着列車で来阪、……正午大阪城内紀州御殿の寺内師団長招宴に臨み、大阪各方面の名士と歓談を交へ午後二時から堂ビル清交社で講演を試みた」と報じられている。
- 111 これは一八八五年に和歌山城から移築されていた御殿で、一九三一年に第四師団司令部庁舎が新築されるまで、ここに司令部があった。これ以降は大阪市に無償貸与された（前掲『地域のなかの軍隊4 古都・商都の軍隊 近畿』三〇一—三一頁）。
- 112 『平生日記』一九三三年五月六日。
- 113 同上、一九三二年八月八日。
- 114 前掲『憲法講話』一六〇頁。

（本学教育学部非常勤講師）